主日礼拝説教「王のいる世界」予稿

日本基督教団石神井教会　2026年11月22日

【旧約聖書日課】サムエル記下　5章1～5節

1イスラエルの全部族はヘブロンのダビデのもとに来てこう言った。「御覧ください。わたしたちはあなたの骨肉です。2これまで、サウルがわたしたちの王であったときにも、イスラエルの進退の指揮をとっておられたのはあなたでした。主はあなたに仰せになりました。『わが民イスラエルを牧するのはあなただ。あなたがイスラエルの指導者となる』と。」

3イスラエルの長老たちは全員、ヘブロンの王のもとに来た。ダビデ王はヘブロンで主の御前に彼らと契約を結んだ。長老たちはダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。

4ダビデは三十歳で王となり、四十年間王位にあった。5七年六か月の間ヘブロンでユダを、三十三年の間エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治した。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一　15章20～28節

20しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。21死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。22つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。23ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、24次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。25キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。26最後の敵として、死が滅ぼされます。27「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。28すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

【福音書日課】ルカによる福音書　23章35～43節

35民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」36兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、37言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」38イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。39十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」40すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。41我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」42そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。43するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

一緒に楽園にいる【こども説教のために】

教会暦の一巡りの終わり、「終末主日」を迎えました。教会は、この日を、主イエス・キリストが世界の王となってくださることを記念する日としてきました。主イエスが王として支配される国が「神の国」として完成される日が来ることを信じて、その日の訪れを、希望をもって待つのです。

主イエスが十字架につけられたとき、両隣りの十字架には犯罪人がつけられていました。一人は主イエスのことを罵りましたが、もう一人は言いました、「**イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください**」。「主イエスがご自分の支配なさる王国においでになられたとき、その王国の民の一人として、このわたしを数えてください」、と願ったのです。

主イエスは、「**あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる**」とお答えになられました。「**楽園**」は「パラダイス」です。「パラダイス」は、元々は古いペルシアの言葉で、「王の庭園」や「果樹園」を意味しました。主イエスの王国の民の一人になることを願った犯罪人に、主イエスは、「あなたは、もう、わたしの王国の庭園に一緒にいる」とおっしゃられたのです。

そこは、豊かな実りの結ぶ果樹園のような庭園であるに違いありません。十字架の上の犯罪人は、死の前に、主イエスと共に実りを結ぶように、招かれたのです。その実りの収穫を喜び、感謝するように、導かれたのです。

油を注ぐ

わたしたちの教会は、今日一日を「オープンチャーチ」とする準備をしてきました。この機会に、近隣にお住まいであったり信者のご家族や知り合いであったりしても普段は教会においでになることのない方に、足を運んでいただければと願っています。

教会は、本来、いつでも、だれにでも開かれたところです。本当であれば、多くの神社がだれでもふらりと立ち寄って参拝できるように、教会も、だれでもがふらりと立ち寄っていただけるようなところでありたいのです。

実際の教会は、相当に敷居の高いところと思われているようです。確かに、教会には、洗礼を受けた信者かどうかという区別があります。教会によっては、信者同士が互いに個人的な関係を深めることを積極的に勧めている場合もあります。あるいは、「教会に行ったら、信者にならなければいけないのではないか」、「教会では、個人的なことを根掘り葉掘り聞かれるのではないか」などと思われて、躊躇されている方もあるかもしれません。そう思われているとしたら、あるいは実際にそういうことが強いられるようなことがあるとしたら、申し訳ないと思います。

それでも敢えて申し上げれば、教会が一つの囲われたところである、というのも確かなことです。土地や建物がそうだ、ということではありません。教会という営み、あるいは教会に連なる信者は、自分たちを一つの囲いの中にあるものとして理解している、ということです。それは、「神の国」という囲いです。

現代社会の価値観の中で、わたしたちは皆、だれにも支配されない自由を有していると考えて生きているかもしれません。この数世紀の間に、長く支配権力として君臨してきた王制の多くは打ち倒され、あるいは骨抜きにされてきました。人がだれかに支配されることも、だれかを支配することも、あってはならないとされてきたのです。

それでも、わたしたちは、無意識のうちに、だれかを自分の支配者に祭り上げているところがあります。自分自身か、他のだれかを、です。

旧約聖書の英雄とも言えるダビデは、軍事指導者として頭角を表し、王となった人物です。彼の伝記は、理想の王として後代まで語り継がれました。彼は、力づくで王座に着いた者ではありませんでした。伝記は、ダビデが人々から乞われて王になったと伝えています。イスラエルの人々は、それまで別の王家の者を王としていましたが、その王家を見限って、ダビデを自分たちの王とするために油を注いだのです。そのとき、ダビデはすでに、別の人々、ユダの人々からも油を注がれて、王とされていました。人々は、こぞってダビデを自分たちの王、自分たちの支配者とするために、油を注いだのです。

「わたしを思い出してください」

「油注がれた者」という意味の言葉を、旧約聖書のヘブライ語では「メシア」と言います。新約聖書のギリシア語では「キリスト」です。

主イエスのことを、わたしたちは「キリスト」とお呼びします。主イエスの弟子たち、使徒たちがそのように呼ぶようになったからです。それは、いつからだったのでしょうか。

主イエスのことを伝える福音書を読んでみると、十字架につけられる前、弟子たちを引き連れて主イエスが宣教活動をされていた三年ほどの間に、弟子たちが主イエスのことを「キリスト」とか「メシア」と呼んだという話は、多くありません。もしかすると、そのように呼ぶ人々がいるので、恐る恐る自分たちもそう呼んでみた、ということだったのかもしれません。何となれば、「キリスト」や「メシア」という呼び方には、その方を「王とする」という意味合いがあったからです。

主イエスを「**王**」に祭り上げようとした人々がいたことを、福音書は伝えています（ヨハネ 6:15）。弟子たちの中にも「熱心党」と呼ばれる政治活動をしていた者がいましたから（ルカ 6:15「熱心党と呼ばれたシモン」）、主イエスを政治指導者として権力を奪ったら、彼を王に擁立しようと夢想していたかもしれません。実際、主イエスが十字架刑に処せられた際の罪状書きは「**ユダヤ人の王**」と記されていたのです。主イエスは、人々が油を注いで自分たちの「王」に祭り上げようとしたことの責任を問われて、裁判にかけられた、とも言えるのです。

もっとも、そのような人々は、主イエスがあっけなく逮捕され、裁判にかけられても抵抗一つしない姿を見て、幻滅したことでしょう。自分たちの「メシア」を見限り、「王」の座から引きずり下ろし、見捨てたのです。

そのような中で、一人、主イエスを自分の「王」としようとした者がいました。「**イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください**」と言った、あの犯罪人です。悪を犯してきた者です。彼は、十字架の上で抵抗することもなくご自分の死を待つお方を、ご自分の王国においでになられるお方とお呼びし、そこで憶えられることを願ったのです。

「あなたは今、わたしと一緒に、わたしの王国の囲いの中にいる」。それが、主イエスのお答えでした。

弟子たちは、このお方を「油注がれた方」＝「キリスト」とお呼びしました。人生のどこでもなく、自分の死の間際に、「わたしの王」とお呼びし、「お憶えください」と願えるお方を、「キリスト」とお呼びするようになったのです。このお方を「キリスト」とお呼びする者たちが、このお方を王とする者たちの囲いの中、教会に、今日も共にいるのです。